

学会活動の回顧と展望

今後はさまざまな活動を通して被服整理学という分野が広く社会に認知されるよう、他分野領域との共同研究、ベテランと若手部会員が互いに知恵を出し合い活発に研究活動ができる開かれた部会として発展することを期待したい。

参 考 文 献

- 1) 岩崎芳枝：家庭科学研究，**212**，1-21 (1996)
- 2) 田川美恵子：家政誌，**49**，531-533 (1998)
- 3) 片山倫子：学術の動向，**12** (8)，54-57 (2007)

民 俗 服 飾 部 会

部会長 村 田 陽 子

昭和 43 (1968) 年民俗服飾研究を志す中嶋朝子氏ほかを中心とする有志が、「民俗服飾研究委員会」を構想し、小川安朗会長のもとに発足をみた。以降、国内外にフィールドワークを中心に、地域に発生し多様な生活条件に対応しながら独自に発展した服飾の実態を把握し、考察を重ねてきた。前回報告までの 30 年間に国内はほぼ二巡したので視点を換え、まとまりある地域に共通のテーマを設定した実態調査とした。

平成 10 (1998) 年～11 (1999) 年は、黒潮が運ぶ海の幸と服飾をテーマに、黒潮と共に太平洋沿岸に押し寄せる鰯・鰹漁が生んだ万祝に代表される海の服飾について伝播・変遷・地域性などを確認した。平成 12 (2000) 年は、信州・飛騨諸街道にみる服飾とし、中山道・北国街道などの要衝や宿場町において街道が育てた服飾文化を探った。続いて「近代の布」と題し、明治以降、近代工業の発展とともに我々に提供された各種各様の衣料素材もその役目を終え、身近から消えつつあるので、それらの果たした働きと恩恵を改めて確かめるべく、第一回銘仙、第二回モスリン、第三回続モスリンと染め木綿、第四回紡績糸・緋・緋文様の世界、第五回縮緬とその展開、第六回起毛織物のいろいろというテーマを設け、6 年をかけて調査・研究した。部会員相互に更なる研究への刺激を受け、意欲をかきたてられたことであった。平成 19 年度以降は、見学会に切りかえ、総会・研究発表会に続けて研修を実施することとした。見学先は再訪もあったが参加者の多くは初訪であり、それぞれの見学先においても見せ方、説明などに進化が見られ、より広く深い知識と理解を得ることができた。

また、グループ別に研究課題を選び、その成果を各年の研究発表会において口述発表し、論集に掲載しているが、麻グループは関東の一部を除き、ほぼ全県の調査を完了している。

しかし一方では、近年の大学における被服関連学科

の凋落は凄まじく会員数は減少し続け、かつ、現役教員数も僅少となり部会の存続は困難になった。平成 20 年度総会において今後の運営につき討議を重ねた結果、本年度を最後に部会活動に終止符を打ち解散することを決定した。部会結成以来 40 年、何かとご指導ご支援をいただいた日本家政学会本部および諸先輩方に対し衷心からの謝意を申し上げつつ、日本家政学会 60 周年記念号部会活動報告としたい。

以下にこの 10 年間の活動内容を 1. 部会長 2. 部会総会・研究発表会・講演会 3. 研修会およびセミナー記録 4. 見学会 5. 民俗服飾研究論集に分けて記述する。

1. 部会長

徳永幾久 平成 4～18 年

村田陽子 平成 19～21 年

2. 部会総会・研究発表会・講演会

平成 10 年 11 月 29 日 (東京家政学院中・高校舎) 研究発表 7 件、九州及び三陸から房総地区研究調査報告 7 件、平成 11 年 12 月 5 日 (東京家政学院中・高校舎) 研究発表 7 件、駿河・伊勢・近江地区研究調査報告 2 件、講演会「奥三河の旧商家の実態—古橋家を中心に—」元日本風俗史学会会長 芳賀登、平成 12 年 12 月 10 日 (大妻女子大学) 研究発表 4 件、信州・飛騨諸街道地区研究調査報告 6 件、講演会「近代庶民の和服事情」服飾研究家 笹岡洋一、平成 13 年 12 月 2 日 (共立女子大学) 研究発表 6 件、講演会「明治・大正・昭和のきものにみる銘仙」服飾研究家 山下悦子、平成 14 年 12 月 8 日 (共立女子大学) 研究発表 4 件、講演会「モスリン友禅を中心とした京都の染色業」京都市染織試験場 野崎邦雄、平成 15 年 12 月 14 日 (共立女子大学) 研究発表 4 件、講演会「近代の布ときもの—再生への着想と着装—」ファッションデザイナー 赤野安、平成 16 年 12 月 14 日 (共立女子大学) 研究発表 3 件、講演会「ニコニコ緋を収集して—庶民

の思潮と綿染絁」東京芸術大学大学院 北田正弘、平成 17 年 12 月 11 日（共立女子大学）研究発表 3 件、講演会「縮緬雑考」服飾研究家 笹岡洋一、平成 18 年 12 月 10 日（共立女子大学）研究発表 2 件、講演会「17～19 世紀ヨーロッパにおける捺染の展開」文化女子大学 辻ますみ、平成 19 年 9 月 13 日（東北福祉大学）研究発表 2 件、講演会「芹沢銈介の型染と生活工芸」東北福祉大学・芹沢銈介美術工芸館 濱田淑子、平成 20 年 9 月 5 日（山形県郷土館文翔館）研究発表 1 件、講演会「山形の青苧の生活文化と現代の取組」東北芸術工科大学東北文化研究センター 菊地和博

3. 研修会およびセミナー記録

＜研修会＞平成 10 年 8 月 25～29 日「鰯のくる海、三陸から房総へ」東北・関東（水沢・大船渡・陸前高田・気仙沼・松島・双葉・日立・犬吠埼・館山）博物館・工房等 12 カ所見学、平成 11 年 8 月 23～27 日「鰹・鮑の海から湖東近江へ」関東・東海研修（焼津・掛川・舞坂・日間賀島・松阪・伊勢・奏荘・五箇荘・近江八幡）博物館・工房等 14 カ所見学、平成 12 年 8 月 22～25 日「信州・飛騨諸街道にみる服飾」中部研修（鬼無里・須坂・松本・岡谷・下諏訪・飛騨高山）博物館等 10 カ所見学

＜セミナー＞平成 13 年 8 月 21～22 日「近代の布第 1 回銘仙」アルカディア市ヶ谷、講演「明治以降の銘仙の生産と流通について」群馬県繊維工業試験場 新井正直、「近代文学にみる銘仙について」笹岡洋一、「近代の衣生活と銘仙の存在意義」徳永幾久、平成 14 年 8 月 23～24 日「近代の布第 2 回モスリン」アルカディア市ヶ谷、講演「モスリンの歴史と日本への導入・普及をめぐる」目白短期大学 先川直子、「モスリンの生産と流通」元日本毛織 藤尾正己、平成 15 年 8 月 28～29 日「近代の布第 3 回続モスリンと染め木綿」日本毛織（一宮工場・創作工房）、「毛織物新素材開発」日本毛織 松井進、「三河木綿産地の今昔」三河木綿研究家 白井政二、「日本毛織モスリン資料とヨーロッパ織物コレクション」元日本毛織 藤尾正己他、平成 16 年 8 月 26～27 日「近代の布第 4 回紡績糸・絁・絁文様の世界」群馬県繊維工業試験場・足利工業高校・邑楽町公民館・中野絁資料館・桐生織塾、「両毛産地における織物生産の概要について」群馬県繊維工業試験場 新井正直、「工業資料館資料について」足利工業高校 茂木賢一、「中野絁について」中野絁保存会 小久保シズ子、「武藤和夫染織コレクション」桐生織塾 武藤和夫、平成 17 年 8 月 29～30 日「近代

の布第 5 回縮緬とその展開」ルビノ京都堀川、塩野屋、伊達美術、「縮緬とその展開—歴史的概要」西陣織物館 藤井健三、「丹後の縮緬」京都府織物・機械金属振興センター 高橋茂夫、平成 18 年 8 月 28～29 日「近代の布第 6 回起毛織物のいろいろ」ホテルアバローム紀ノ国、泉大津市織物館、和歌山染工、妙中パイル、高野口パイル織物、講演「日本における起毛織物の変遷—産業・経済の視点から」広島経済大学 高嶋雅明

4. 見学会

平成 19 年 8 月 13～14 日芹沢銈介美術工芸館、仙台市博物館「京の優雅—小袖と屏風—千總コレクション」講演「京の優雅 老舗の美意識」京都国立博物館 切畑健、平成 20 年 9 月 5～6 日小松織物工房（白鷹米琉板締小絁）小松紀夫、古代織参考館 山村洋子、新田織物（米織・紅花染）新田英行

5. 民俗服飾研究論集（年度は発行年，研究報告論文）

第 11 集（平成 10 年）「秋田県在方商人の生成と発展—綿木綿を中心に—」徳永幾久、「地方文書からみた庶民の衣服」石川妙子、「埼玉県の麻について」塩田公子・正地里江・岡野和子、「茨城県の麻について」村田陽子、「宮城県の麻について」松田知子・遠藤時子・村田陽子、「アメリカン・キルトの文様について」玉田真紀、「台湾先住民の衣文化—ブヌン族女性の祈りと手わざ—」藤弘洋子、「蝶飛んで文化をのこす—アジアの服飾文化から—」徳永幾久、「民俗服飾の生態について」徳永幾久、第 12 集（平成 11 年）「伊達政宗所用白絹縮地雪薄七つ紋単衣について」石川妙子、「小袖における下前裾文について—特に墓の格式との関連を主として—」徳永幾久、「アメリカン・キルトの芯と詰め物について」玉田真紀、「長野県の麻について—北部地方—」中村やよ江・岡野和子、「亜麻について」妹尾清子、「丹波布について—技術の伝承—」吉田扇、「海にかかわる麻製品について」塩田公子、「家紋について」遠藤時子、第 13 集（平成 12 年）「服飾印文にみる五芒星について—旧上杉士族・紅花商家にみる—」徳永幾久、「徳川実紀にみる伊達政宗と徳川三代」石川妙子、「日本の麻と韓国の麻」村田陽子、「アメリカン・キルトとキリスト教の信仰との関わりについて」玉田真紀、「小学生の洋装化—高崎・前橋地域における産業形態を中心として—」末久真理子・酒井哲也、第 14 集（平成 13 年）「服飾生成についての一考察—傘・背守りへの移行を例として—」徳永幾久、「重ね衣裳の文化を考える—結婚衣裳を対象として—」徳永幾久、

学会活動の回顧と展望

「大名家の婚礼調度としての洗い張り道具の意義」石川妙子, 「岐阜県の麻について」村田陽子, 「アメリカン・キルトの星文様について」玉田真紀, 「岡谷市の製糸および琴糸」妹尾清子, 第15集(平成14年)「銘仙とその製造技術の変遷」新井正直, 「銘仙の周辺」笹岡洋一, 「愛知県の麻について」村田陽子, 「アメリカにおける絹のキルトの特色について」玉田真紀, 「家紋を背負って寝る家長習俗」徳永幾久, 第16集(平成15年)「三重県の麻について」村田陽子, 「アメリカン・キルトの薔薇文様について」玉田真紀, 「子供の着物の文様から見えるもの—明治・大正・昭和の男児衣服を対象に」百合草孝子, 「近世の綿織物—小倉織」富氣久江, 「幼児衣服にみる背守りのシンボル性—紅花商人の子女衣服を例として」徳永幾久, 第

17集(平成16年)「滋賀県の麻について」村田陽子, 「子供の着物の文様から見えるもの—明治・大正・昭和の女児衣服を対象に」百合草孝子, 「カナダ・ノバスコシア州におけるタータンキルト—ハリファックス市を中心に」斉藤祥子, 「日本のはきもの下駄についての雑考」山水きぬ, 第18集(平成18年)「通称ニコニコ緋に見る木綿捺染緋技術の発達と産地」新井正直, 「収集下駄の考証」山水きぬ, 「丹波布の再生」吉田 扇, 「岡山の織物—烏城紬」富氣久江, 「京都府の麻について」村田陽子, 「思想の形象化・服飾化の事例としての衣服文様について」徳永幾久, 第19集(平成20年)「丹後の縮緬」高橋茂夫, 「鹿児島・宮崎・大分各県における麻の利用状況調査」妹尾清子, 「奈良県の麻について」村田陽子

住 居 学 部 会

部会長 中 島 喜代子

平成10年～19年の10年間は、地球環境問題の認識の拡大、少子高齢化のさらなる進展があった時期である。また、政治思潮においては、小泉政権の新自由主義が、最盛期を迎えた時代でもある。

住生活面でも多くの問題が現れている。欠陥住宅問題、マンション建て替え問題、シックハウス、耐震偽装問題等である。これらの問題対策のため、住政策面でも処理に追われている。平成12年の住宅の品質確保の促進等に関する法律、平成13年の高齢者の居住の安定確保に関する法律、平成14年のマンションの建て替えの円滑化等に関する法律、平成18年の住生活基本法、平成19年の改正建築基準法(耐震審査強化等)である。これらの問題の根底に民間活用、ストック重視、環境重視、高齢者重視等の共通した視点がある。

これらの問題に対して、住居学部会も問題認識を共有し、活動を行っている。この間の住居学部会の動きを、年次を追ってまとめると、以下のようになる。

1. 住居学部会の動向

(1) 平成10年度(1998年)

部会長 沖田富美子, 1998年5月31日(日)に日本女子大学で行われた。

総会では、1997年度に住居学部会に対するアンケートの結果による今後の住居学部会の存続及び意義について再確認を行った。アンケート時提案のあった部会

運営にあたっては、これまでの学校(住居学科の名称のある)単位の運営だけでなく、地域的にまとまって運営していく方針をとることの確認を行った。

なお平成11、12年度(1期2年)は、関西地域の会員に運営していただくことに決定、部会長を北浦かほる氏(大阪市立大)に決定した。日本学術会議研究連絡委員会中島明子氏(目白短大)より17期住環境分野の取りくみの説明と研究参加への報告が行われた。

「住田先生、梁瀬先生、小川先生を囲んでお話を聞く」会を行った。現在の教育の立場、環境、御出身がそれぞれ異なる3人の住居学をリードしてきていただいた先輩から、住居学に対する考え、研究のきっかけや研究に対する態度、これからの住居学に対する思いなど、多くの示唆のこめられたお話を聞くことができた。

(2) 平成11年度(1999年)

部会長 北浦かほる, 1999年5月29日(土)に名古屋の名城大学で行われた。

テーマ: 21世紀に向けての新しい住まい方

多世代共生型住宅「アブランド向山」の例から—大家族で暮らす・発想はホテル・雰囲気は一軒家—
講師: (株)さんわ専務取締役 岩城隆就氏

「アブランド向山」は1997年に設立された45LDKの多世代共生型住宅である。「45の専用個室の発想はホテルからとっているわけですが、雰囲気は